

ヘンゼルとグレーテル

ある森のはずれに、木こりと継母、それに、ヘンゼルという男の子と、グレーテルというダウント症の女の子が住んでいました。

ある夜、空腹で寝つけなかったヘンゼルとグレーテルは、父と継母の会話を聞いてしまいます。

「食べるものがいいんだから、あの子たちを森に捨てましょう」

「子供を捨てるなんて、考えられない」

怖れたグレーテルは、ヘンゼルに相談します。

「どうしようお兄ちゃん」

「僕に任せておけ」

ヘンゼルは、夜中に屋外で、白い小石をいっぱい拾いました。

翌朝、一睡もできなかった父親が言います。

「ヘンゼル、グレーテル、よく聞きなさい。今日は森に行くよ。これは、お昼ご飯のパンだよ。一緒に楽しもうね」

ヘンゼルとグレーテルは、森に捨てられることを知っていました。それでも、目を真っ赤に腫らした父親の言う通りにしました。

森の奥に着くと、父親は、木を切りに行くと言い残し、二人を残して家に戻ります。

「お兄ちゃん、本当に私たち捨てられちゃった」

「お父さんの目を見たかい？」

「真っ赤だった」

「お父さんも必死だよ」

そこへ、綺麗な小鳥がやってきました。

「わあ、綺麗な小鳥」

「グレーテル、家には戻れるから、少し森で生活してみようか」

「お父さんとお母さんもそう願ってるんだよね」

「よし、あの綺麗な小鳥についていこう」

二人は、綺麗な小鳥の後を追いました。

すると、どうでしょう。お菓子でできた家にたどり着いたのです。

「お兄ちゃん、この家を食べようよ」

「ダメだよ、人の家だよ」

「えー、ダメ？」

「そう、勝手にそんなことしちゃダメだよ」

ヘンゼルは、玄関口に立ち、家の人にあいさつしようとしました。

すると、家の中から、おばあさんが出てきました。

「ヘンゼルとグレーテルと申します。もしよろしければ、お菓子を分けていただけないでしようか」

「どうぞ、お食べ」

「優しいんですね！」

「優しい…？」

おばあさんは、少し驚きましたが、お菓子を食べる子供たちを鋭い目で見つめました。実は、おばあさんは、人喰い魔女だったのです。

「お兄ちゃん、美味しいね」

「うん、神様のご褒美だね」

「ヘンゼルとグレーテルや、家の中にも食べ物があるから、おいで」

「はい、おばあ様」

魔女のご馳走を食べ、二人とも、満腹で眠りについてしまいました。

グレーテルが目を覚ますと、ヘンゼルがいません。

「グレーテルや、ヘンゼルは、大きな鳥かごの中にいるよ。食事を与え、太らせておやり」

「どうして？」

「私は、魔女だよ。お前たちを食べるつもりさ」

「分かりました」

「え？」

グレーテルは、甲斐甲斐しく、ヘンゼルに食事を与えに行きました。

「お兄ちゃん、どうすればいい？」

「いいかい、グレーテル、僕はダメかもしれない。でも、君は助ける」

「どうやって？」

「隙を見て逃げよう」

ある日、グレーテルが魔女の元に食事をとりに行くと、魔女は寝入っていました。その横には、鳥かごのカギが。

「今しかない」

グレーテルは、意を決して、鍵を盗り、ヘンゼルの元に走りました。

「私、悪いことしちゃった。鍵を盗んだの」

「いいんだ、それは悪くない」

二人は手に手を取って駆け出しました。

「お待ち！」

そこへ、魔女が飛んできました。

「私から逃げられるとでも思っているのかい？」

「グレーテル、僕が食い止める、逃げな！」

「嫌、お兄ちゃんと一緒にいる！」

「ダメだ！逃げろ！」

「兄弟愛だねえ。フフフ安心しな、私の胃袋で一緒になれるわい」

魔女が近づくと、ヘンゼルがグレーテルをかばいます。

まさに、ヘンゼルが魔女に食べられるという、その時、グレーテルがお父さんに貰ったパンを持ち、言い放ちました。

「魔法でこのパンを人間に変えればいいのに」

「…」

魔女は、キヨトンとしました。

「…気付かんかった」

「グレーテル、いいアイデアだよ」

「お兄ちゃん、逃げて！」

グレーテルは、パンを魔女の近くに放り投げ、ヘンゼルと共に、逃げ出しました。

「白い小石を頼りに走るんだ」

「お兄ちゃん、凄い。目印だったんだ！」

「言つただろ、僕はどんなことがあっても、君を助ける」

「あら？ 小石が光ってる」

ヘンゼルとグレーテルは、立ち止まり、小石を拾うと、それが真珠に変わりました。

「これ、真珠だ」

「凄い、これがあれば、お父さんとお母さんになんでも食べさせてあげられるわ」

「急ごう、魔女が追ってくる」

その時、森の奥から魔女の声が聞こえました。

「勇敢なる子供たちよ。もう怖れることはない。お前たちには負けた。それは褒美だよ」

「ありがとうおばあ様。長生きしてね」

「魔女に、長生きして、かい？」

綺麗な小鳥が空を舞います。

「グレーテル、お前こそ長生きしな。親孝行するんだ」

二人は、大量の真珠を抱え、家に戻ることができました。

父親が出迎えます。

「おお、戻ってきたか！本当に済まなかつた」

「いいんだよ、お父さん」

「お母さんは？」

「奥で寝てる」
「病気なの？」
「あの日以来、何も食べてないんだ」
「これで、食事をあげて」
グレーテルが真珠を差し出すと、お父さんは驚きました。
「魔女に貰ったんだ」
「早速、食事を買いに行って来よう」
お父さんが出かけ、ヘンゼルとグレーテルは、母親の元に行きました。
「本当に済まなかつたね。森に捨てるだなんて」
「森で魔女に会つたの」
「何かされたのかい？」
「食べられそうになつたけど、色々あって、真珠をたくさんもらつたの」
「真珠を？」
「うん、お母さんに、ネックレスを作るね」
「…グレーテル、なんて優しい子なの」
「捨てたことは忘れて」
「お母さんも必死だったんだろう」
「お母さんの本当の気持ち、言わなくても解るよ」
「… (泣)」
継母は、ただただ泣くばかり。
「お母さんが亡くなる時、言ってた。…生まれ変わって私たちを救うんだって」
「なあ、グレーテル」
「なあに？」
「あの綺麗な小鳥、お母さんの生まれ変わりだったんじゃないかな」
「…お母さん (泣)」
「不器用な人だったからな」
「…私、みんなに支えられてる」
「君が幸を呼ぶんだ」

了